

みずむしたむし用薬

ワーカーシートNo. 38

製品群No. 58

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のあるそれ すべき副作用のあるそれ	D 運用のおそれ E 患者背景(既往歴、治療状況等) F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	
評価の観点	薬理作用	相互通報 併用禁忌他 に重篤な副作用 により重大な問 題が発生する おそれ)	重篤な副作用のあるそれ を副作用のおそれ	重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ を副作用のおそれ	重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ を副作用のおそれ	重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ を副作用のおそれ	重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ を副作用のおそれ
評価の観点	薬理作用	相互通報 併用禁忌他 に重篤な副作用 により重大な問 題が発生する おそれ)	重篤な副作用のおそれ を副作用のおそれ	重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ を副作用のおそれ	重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ を副作用のおそれ	重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ を副作用のおそれ	重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ を副作用のおそれ
評価の観点	薬理作用	相互通報 併用禁忌他 に重篤な副作用 により重大な問 題が発生する おそれ)	重篤な副作用のおそれ を副作用のおそれ	重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ を副作用のおそれ	重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ を副作用のおそれ	重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ を副作用のおそれ	重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ を副作用のおそれ

製品群No. 58

みづむしたむし用薬

リスクの程度 の評価	A 藥理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ すべき副作用のおそれ	D 滅用のおそれ	E 慢性薬物作用による症状等 (過剰な副作用につながらるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながらるおそれ)	G 滅用方法(慢性用のおそれ)	H スイッチ 化等に準じて 使用環境の 変化
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ 併用禁忌(他の 薬との併用に よる腫瘍が発生する おそれ)	重篤な副作用のおそれ 併用注意	重篤な副作用のおそれ 薬理毒性に 特異体质ア レルギー等 によるもの	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ 薬理毒性に 特異体质ア レルギー等 によるもの	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ 薬理毒性に 特異体质ア レルギー等 によるもの	下記の皮膚真 菌症の治療禁 忌症の足白癬、股部 白癬、体部白 白癬、乳頭管 感染乳尼膏 生殖性白斑、 指間じらん、爪固炎、そ の他の皮膚カ ンジダ症

みずむしたむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

評価の観点	A 薬理作用	B 相互作用	C 重複な副作用のおそれ		D 過用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化
			重複な副作用のおそれ	重複な副作用のおそれ					
抗真菌成分	薬理作用	相互通作	併用禁忌(他の併用により重複作用が発生するおそれ)	薬理作用注意	薬理・毒性に特異的体质アレルギーによるもの	薬理・毒性に基づく過応答忌	症状投与 「おとこ」に障害の再発・悪化のおそれ	過度反応の発現 につながるおそれ	下記の皮膚真菌症の本部白瘡(体か水疱性白瘡、頭髪・足部白瘡(脚蹠)、足部白瘡(指間))、外陰部炎、外耳炎、乳頭炎、鼻咽炎、外陰カクンジダ、皮膚カクンジダ、湿疹
ゾーナール	アントミコナ	アントミコナ	アントミコナ D液 クリーム 液	アントミコナ D液 クリーム 液	アントミコナ D液 クリーム 液	アントミコナ D液 クリーム 液	アントミコナ D液 クリーム 液	アントミコナ D液 クリーム 液	1日2～3回塗布する。

みずむし・たむし用薬

製品群N. 58

ワークシートN.38

リスクの程度 評価の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用のおそれ)	D 運用のおそれ F 効果・効果(症状の悪化) G 使用方法(像使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	
					スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	効能効果 変化
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ 併用禁忌(他の 薬と併用に より重大な問 題が発生する 場合おそれ)	重篤な副作用のおそれ 併用注意 併用注意 併用注意(他 の薬と併用に より重大な問 題が発生する 場合おそれ)	薬理に基づく 適応禁忌 薬理に基づく 適応禁忌の判 別	薬理に基づく 適応禁忌 薬理に基づく 適応禁忌の判 別
元白蟻成分	デオコナジー ル	医療用医 品としてなし	トルナフター ト	ハイドラー ジン軟膏液 ナフタートの 抗黒カバ 対象菌 MIC <i>[μg/ml]</i> <i>Trichophyton rubrum</i> <i>I. interdigitale</i> <i>T. asteroides</i> <i>Microporum suecicum</i> <i>Microsporum lapponeum</i> <i>Eidemodotid on angulata</i> <i>Candida albicans</i> <i>Cryptococcu s neoformans</i> <i>Aspergillus fumigatus</i> <i>Aspergillus niger</i>	通常1日2~3回、適量を 患部に塗布又は塗擦す る。	汗毛状白瘡、 项皺状白瘡、 皮斑状白瘡、 癰腫

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

評価の視点	A 球理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	D 薬用のおそれ	E 治療状況(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながらるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながらるおそれ)	G 使用方法(使用のよそれ)	H スイッチ 化等に伴う使用環境の変化	
								重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ
ヒドアゾール・マロス・ボーラム・マイス・ボール液	抗真菌作用 抗アレルギー 抗真菌作用 抗アレルギー	併用禁忌(他の併用に よる重大な副作用が発生する おそれ)	併用禁忌(他の併用に よる重大な副作用が発生する おそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ
	ヒドアゾール・マロス・ボーラム・マイス・ボール液	抗真菌作用 抗アレルギー 抗真菌作用 抗アレルギー	併用禁忌(他の併用に よる重大な副作用が発生する おそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ

製品群 No. 58

みずむし・たむし用薬

ワークシートNo.38

リスクの程度 の評価	A. 薬理作用	B. 相互作用	C. 重篤な副作用のおそれ	D. 滥用のおそれ	E. 過敏者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながらるおそれ)	F. 効能・効果(注状のおそれ) につながらるおそれ	G. 使用方法(誤使用のおそれ)	H. スイッチ 化等に伴う変化	I. 効能効果
評価の拠点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ 併用禁忌(他の併用に より重篤な副作用が 発生するおそれ)	重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	重篤な副作用の誤用 による過剰な用量を取 るおそれ	スイッチ化 等に伴う変化	重篤な副作用の誤用 による過剰な用量を取 るおそれ
元ヒスタミン受容体拮抗薬外用成分	ヒスタミン受容体拮抗薬外用成分	アレルギー性皮膚炎による発赤、腫脹などのアレルギー性皮膚炎の1回使用により腫脹に抑制される。	アレルギー性皮膚炎を皮膚表面に起因する発赤、腫脹などのアレルギー性皮膚炎は、本品により腫脹に抑制される。	アレルギー性皮膚炎による発赤、腫脹などのアレルギー性皮膚炎を皮膚表面に起因する発赤、腫脹などのアレルギー性皮膚炎は、本品により腫脹に抑制される。	アレルギー性皮膚炎による発赤、腫脹などのアレルギー性皮膚炎を皮膚表面に起因する発赤、腫脹などのアレルギー性皮膚炎は、本品により腫脹に抑制される。	アレルギー性皮膚炎による発赤、腫脹などのアレルギー性皮膚炎を皮膚表面に起因する発赤、腫脹などのアレルギー性皮膚炎は、本品により腫脹に抑制される。	重篤な副作用の誤用 による過剰な用量を取 るおそれ	通常、症状により過剰な用量を取 るおそれ	重篤な副作用の誤用 による過剰な用量を取 るおそれ
マレイン酸クロロフェニラミン成分	マレイン酸クロロフェニラミン成分								
高熱成分	オクタックス	本剤は抗アレルギー性皮膚炎に対する作用を示さないことに、またヒトの皮膚感覚のうち触覚感覚を抑制するが、他の皮膚感覚には影響を与えないことなどから、若じて皮膚感覚剤とは作用機序を考慮される。皮膚感覚をもつて風に対するこの機序に対するこの機序が複合的に作用するといわれている。	0.1~5%未満 (熱感、しゃべり感、刺激感、肌搔け感、ひびき感等)、季節感、紅斑増強、分泌物増加、浸潤傾向	本剤に陥りて過敏症の発生の可能性のある人への大量又は長期にわたる広範囲の使用に対する小児に対する広範囲の使用	・肌あるいは皮膚及び粘膜には感覚又ははたらきがないことは可能であるが、正常人の場合は、大脳に感覚が認められるが、通常が認められるが、通常の感覚のうちには感覚が認められる場合がある。	通常、皮膚に過敏症を引き起こすおそれ	通常、皮膚に過敏症を引き起こすおそれ	通常、皮膚に過敏症を引き起こすおそれ	
頭痛成分	プロタミトジン	本剤は抗アレルギー性皮膚炎に対する作用を示さないことに、またヒトの皮膚感覚のうち触覚感覚を抑制するが、他の皮膚感覚には影響を与えないことなどから、若じて皮膚感覚剤とは作用機序を考慮される。皮膚感覚をもつて風に対するこの機序に対するこの機序が複合的に作用するといわれている。	5%以上未満 (熱感、しゃべり感、刺激感、肌搔け感、ひびき感等)、季節感、紅斑増強、分泌物増加、浸潤傾向	本剤に陥りて過敏症の発生の可能性のある人への大量又は長期にわたる広範囲の使用に対する小児に対する広範囲の使用	・肌あるいは皮膚及び粘膜には感覚又ははたらきがないことは可能であるが、正常人の場合は、大脳に感覚が認められるが、通常が認められるが、通常の感覚のうちには感覚が認められる場合がある。	通常、皮膚に過敏症を引き起こすおそれ	通常、皮膚に過敏症を引き起こすおそれ	通常、皮膚に過敏症を引き起こすおそれ	
頭痛成分	セバゲン	皮膚のたん白質と結合して細胞を形成し、吸収、保水、保溼並びに緩和的な防護作用を有する。また、吸收及び分泌抑制剤により創面又は渦巻面などを乾燥させる。	5%以上未満 (発疹、刺激感等)	・外用溶液(散布液)として皮膚に適用しない。 ・軟膏剤・液剤・懸滴剤・リニメント剤・ローション剤等として60%以上配温度に調製し、1日1~数回患部に適用する。	皮膚手足重複部位 (組織修復のための部位) の感染部位が腫瘍している部位(組織修復のための部位)	皮膚手足重複部位 (組織修復のための部位) の感染部位が腫瘍している部位(組織修復のための部位)	皮膚手足重複部位 (組織修復のための部位) の感染部位が腫瘍している部位(組織修復のための部位)	皮膚手足重複部位 (組織修復のための部位) の感染部位が腫瘍している部位(組織修復のための部位)	

みずむし・たむし用薬

製品群 No. 58

ワークシート No.38

リスの程度 の評価	A 薬理作用 B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ すべき副作用のおそれ	D 運用のお こころ	E 効能・効果(金状のおそれ) につながるおそれ	F 効能・効果(金状のおそれ) につながるおそれ	G 使用方法(使用のうそれ)	H スイッチ 等に伴う変化 等に伴う変化
評価の拠点	薬理作用	重篤な副作用のおそれ べき副作用のおそれ	薬理に基づく選択基準	薬理に基づく選択基準	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	効能効果
局所感染成分	ヘルカミン チヤネル	感覚・愛心神経面筋弛緩作用による局所痙攣作用を有する。効力、持続性、毒性、強度は最大であるが、より効力を強めるためには局所感染以外の目的にはエビネフリンを添加して用いる。	感覚・愛心神経面筋弛緩作用による局所痙攣作用を有する。効力、持続性、毒性、強度は最大であるが、より効力を強めるためには局所感染以外の目的にはエビネフリンを添加して用いる。	本剤におい過敏症 の既往歴	頻度不明(既往歴) 頻度不明(既往歴)	頻度不明(既往歴) 頻度不明(既往歴)	仙骨筋群 筋膜群最高用量：回 40mg
耳・鼻咽喉科領域	ヘリカミン チヤネル	感覚・愛心神経面筋弛緩作用による局所痙攣作用を有する。効力、持続性、毒性、強度は最大であるが、より効力を強めるためには局所感染以外の目的にはエビネフリンを添加して用いる。	感覚・愛心神経面筋弛緩作用による局所痙攣作用を有する。効力、持続性、毒性、強度は最大であるが、より効力を強めるためには局所感染以外の目的にはエビネフリンを添加して用いる。	本剤におい過敏症 の既往歴	頻度不明(既往歴) 頻度不明(既往歴)	頻度不明(既往歴) 頻度不明(既往歴)	仙骨筋群 筋膜群最高用量：回 40mg

みずむしたむし用薬

製品群No.58

ワーカーシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ すべき副作用のおそれ	D 運用のお こころ	E 患者背景、既往歴、治療状況等 (重篤な副作用につながらないもの)	F 効能・効果(症状のおそれ) につながらないもの	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化
評価の観点	薬理作用	併用禁忌(他 剤との併用に よる重大な問 題が発生する おそれ)	重篤な副作用のおそれ	薬理作用のおそれ を引き起こす 副作用	薬理作用のおそれ を引き起こす 副作用	薬理作用のおそれ を引き起こす 副作用	薬理作用のおそれ を引き起こす 副作用	薬理作用のおそれ を引き起こす 副作用
局所 麻酔成分	局 所 リタ カイ ン ン	キシロカイン 液[1%]	作用部位 は、神経 のナトリウム チャネルをブ ロックし、神 経における活 動電位の伝 導を可逆的に 抑制し、知覚 神経及び運動 神経を遮断す る局所麻酔薬で ある。局所麻 酔作用時間は 短めで、作用 時間は、強度 により個々によ り異なる。	併用禁忌(他 剤との併用に よる重大な問 題が発生する おそれ)	薬理作用に 伴う重篤な問 題が発生する おそれ	薬理作用に 伴う重篤な問 題が発生する おそれ	薬理作用に 伴う重篤な問 題が発生する おそれ	薬理作用に 伴う重篤な問 題が発生する おそれ
局 所 麻 酔 成 分								

みずむし・たむし用薬

製品群№. 58

リスクの幅度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ すべき副作用のおそれ	D 運用注意	E 飲食管理(既往歴、治療状況等) (薬物相互作用のおそれ)	F 特性・効果・金具の悪化 につながるおそれ	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 等に伴う使 用環境の変 化	I スイッチ 等に伴う使 用環境の変 化
評価指標	薬理作用	相互通用注意	重篤な副作用のおそれ	薬理作用のおそれ	薬理作用の状態	薬理作用の状態	薬理作用の状態	運用量に上 限があるもの	運用量に上 限があるもの
虫類 キルシング ・ 消毒成分	抗菌作用 ・抗真菌作用 ・抗原生動物作用 ・抗寄生虫作用 ・防腐作用 ・虫除け作用	併用禁忌(他 薬との併用に よる重大な問 題が発生する おそれ)	C 重篤な副作用のおそれ すべき副作用のおそれ	D 運用注意	E 飲食管理(既往歴、治療状況等) (薬物相互作用のおそれ)	F 特性・効果・金具の悪化 につながるおそれ	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 等に伴う使 用環境の変 化	I スイッチ 等に伴う使 用環境の変 化
虫類 キルシング ・ 消毒成分	抗菌作用 (in vitro試験) ・広範囲の微生物に作用 し、グラム陽性菌にはは低濃度でより効果を示す。 ・グラム陰性菌には比較的低濃度で効果を示すが、グラム陽性菌に比べて效力が弱い。 ・酵母形態の芽胞には効力を示さない。 ・酵母菌に対して水溶液では静脈注入は静脈作用を示すが、アルコール溶液では口腔内には効力が認められる。	併用禁忌(他 薬との併用に よる重大な問 題が発生する おそれ)	虫類 キルシング ・虫除け作用	虫類 キルシング ・虫除け作用 の特異体質・ア レルギー等 によるもの	ショウブ(0.1% 水溶液)	0.96未満 (過敏症)	本剤は必ず希 釈して服用す ること。 ・外用にのみ使 用する。 ・眼に入らないよ うに注意する。	虫類 キルシング ・虫除け作用 の特異体質・ア レルギー等 によるもの	虫類 キルシング ・虫除け作用 の特異体質・ア レルギー等 によるもの

リスクの程度 評価	A.薬理作用	B.相互作用	C.重篤な副作用のおそれ （薬理学的または併用によるもの）	D.適用のおそれ （既往歴、治療状況等）	E.患者背景（既往歴、治療状況等） （薬理学的または併用によるもの）	F.効能・効果（主治症） につかわるおそれ	G.使用方法（使用法の変化等に伴うおそれ）	H.スイッチ 化等に伴う 使用環境の変化
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ （薬理学的または併用によるもの）	薬理作用のおそれ （既往歴・薬理特性によるもの）	薬理に基づく禁忌 （投与により腫脹の悪化が認められるもの）	慎重投与 （投与により腫脹の悪化が認められるもの）	使用方法（腫脹の悪化等に伴うおそれ）	使用方法（腫脹の悪化等に伴うおそれ）
殺菌・消毒成分	0.1w/vミトール水	・本剤は使用して、炎症型膿性咽頭炎（アレルギー性咽頭炎等）には有効であるが、結核菌及び大部分のウイルスに対する殺菌効果は期待できない。・作用機序では、活性性抑制であるので、表面活性剤で表面張力を低下させ、潤滑作用等を示す。・作用機序は、陰イオン界面活性剤で常電荷面を帯びる塩化ペニシルココゲーミムが陰イオン界面に吸着され、陰イオン表面活性剤を作成する。	・重篤な副作用のおそれ （薬理学的または併用によるもの）	・重篤な副作用のおそれ （既往歴・薬理特性によるもの）	・頻度不明（過敏症）	・頻度は不明・若くは頻度に付けるものとされるが、それによる腫脹の悪化が認められる場合に発生する。	・頻度は不明・若くは頻度に付けるものとされるが、それによる腫脹の悪化が認められる場合に発生する。	・頻度は不明・若くは頻度に付けるものとされるが、それによる腫脹の悪化が認められる場合に発生する。
殺菌・消毒成分	0.1w/vミトール水	・本剤は使用して、炎症型膿性咽頭炎（アレルギー性咽頭炎等）には有効であるが、結核菌及び大部分のウイルスに対する殺菌効果は期待できない。・作用機序では、活性性抑制であるので、表面活性剤で表面張力を低下させ、潤滑作用等を示す。・作用機序は、陰イオン界面活性剤で常電荷面を帯びる塩化ペニシルココゲーミムが陰イオン界面に吸着され、陰イオン表面活性剤を作成する。	・重篤な副作用のおそれ （薬理学的または併用によるもの）	・重篤な副作用のおそれ （既往歴・薬理特性によるもの）	・頻度不明（過敏症）	・頻度は不明・若くは頻度に付けるものとされるが、それによる腫脹の悪化が認められる場合に発生する。	・頻度は不明・若くは頻度に付けるものとされるが、それによる腫脹の悪化が認められる場合に発生する。	・頻度は不明・若くは頻度に付けるものとされるが、それによる腫脅の悪化が認められる場合に発生する。

みずむし・たむし用薬

製品群No. 58

ワーケシートNo.38

リスクの程度 の評価	A 薬理作用 B 相互作用	C' 重篤な副作用の有それ るべき副作用の有それ	D 運用のお 勧めの有それ （重篤な副作用につ つつながりないもの）	E 患者背景（既往歴、治療状況等） （重篤な副作用につ つつながりないもの）	F 効能効果（症状の悪化） につつながるおそれ	G 使用方法（飼使の有それ）	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化
評価の拡点	薬理作用	重篤な副作用の有それ を副作用の有それ	薬理作用に基づく 耐薬性に特異性を もつるものによるもの	薬理作用に基づく 耐薬性の弱さの 再発・悪化のおそれ	重篤な副作用と 重篤な副作用との 併用によるもの	重篤な副作用と 重篤な副作用との 併用によるもの	スイッチ化 用法用量
フェノール	フェノール	本剤は、使用 部位において グラム陽性 菌、グラム陰 性菌、結核菌 には有効であ るが、芽胞、孢 (炭疽菌)、板 菌、黒糞菌等及 び大部分类 ウイルスに対 する効果は 期待できない。 併せて、本剤 は、アメーバ、 カビ、酵母等の 真菌に対する 効果がある。	併用禁忌(他の 併用に問題な ど)の併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意(他 の併用に問題 ないもの)	薬理作用に基づく 耐薬性の弱さの 再発・悪化のおそれ	重篤な副作用と 重篤な副作用との 併用によるもの	スイッチ化 用法用量
殺菌・消毒成分							

みずむし・いたむし用薬

製品群No. 58

ワークシートNo.38

リスクの度数 の評価	△薬理作用 △相互作用	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 服用のお じき悪性作用のおそれ (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う使 用環境の変 化
評価の視点	薬理作用	重篤な副作用のおそれ	薬理作用のおそれ 禁忌とその併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	薬理に基づく き副作用のおそれ 禁忌とその併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	薬理に基づく き副作用のおそれ 禁忌とその併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	薬理に基づく き副作用のおそれ 禁忌とその併用に より重大な問 題が発生する おそれ)
重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ
重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ

製品群No. 59

ワークシートNo.39

皮膚軟化薬(吸引を含む)

「リスクの程度」の評価	A.薬理作用	B.相互作用	C.医師な副作用のおそれ	D.適用のおそれ	E.患者背景・既往歴、治療状況等	F.効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G.使用方法(誤使用のおそれ)	H.スイッチ使用環境の変化
評価の観点	薬理作用	薬理作用	薬理作用のおそれ	薬理作用のおそれ	薬理・毒性に特異体质アレルギーによるもの	薬理に基づく薬理性	薬理に基づく薬理性	薬理に基づく薬理性
角質軟化・保湿成分	バスタロン [®] バスタロバストラック [®] ハンドローション	バスタロン [®] ハンドローション	角質軟化作用により、角質層が剥離作用が異なったので、下部のみ、配慮した。	角質軟化作用が異なった部分で、下部のみ、配慮した。	角質層が剥離作用を示す。正常な皮膚では、角質層が剥離する。バスタロバストラック [®] ハンドローションを下部のみに配慮した。	5%以上又は頻度不明(過敏症)	5%以上又は頻度不明(過敏症)	5%以上又は頻度不明(過敏症)
ヘリソル [®] プリセリン								
アクリル酸・保湿成分	アクリル酸・保湿成分	アクリル酸・保湿成分	アクリル酸・保湿成分	アクリル酸・保湿成分	アクリル酸・保湿成分	アクリル酸・保湿成分	アクリル酸・保湿成分	アクリル酸・保湿成分
ヘリソル [®] ヘリソル [®] ヘリソル [®] ヘリソル [®]	ヘリソル [®] ヘリソル [®] ヘリソル [®] ヘリソル [®]	ヘリソル [®] ヘリソル [®] ヘリソル [®] ヘリソル [®]	ヘリソル [®] ヘリソル [®] ヘリソル [®] ヘリソル [®]	ヘリソル [®] ヘリソル [®] ヘリソル [®] ヘリソル [®]	ヘリソル [®] ヘリソル [®] ヘリソル [®] ヘリソル [®]	ヘリソル [®] ヘリソル [®] ヘリソル [®] ヘリソル [®]	ヘリソル [®] ヘリソル [®] ヘリソル [®] ヘリソル [®]	ヘリソル [®] ヘリソル [®] ヘリソル [®] ヘリソル [®]

皮膚軟化薬(吸出しを含む)

リスクの程度	評価の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 蓄膿な副作用のおそれ	D 運用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (医療的副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(修正使用のおそれ)	H インチ 化等に伴う 使用環境の 変化
外用	評価の視点	薬理作用	相互作用	蓄膿な副作用のおそれ	蓄膿でないが、注意すべき副作用のおそれ	患者背景(既往歴、治療状況等) (医療的副作用につながるおそれ)	症状改善と 副作用の悪化	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化
成 分	銀漢ジフェン ヒドロキシ	アレルギー性 接触性皮炎 による発赤や 腫れなどのア レルギー性反応 は、本剤の回溶布 によく見られる。	外用はなし ジフェンヒド ラミンはあり 一ペタミン コーウ敷膏 シリキーベ生皮 剤の回溶布 によく見られる。	薬理・毒性に特異体质・ア レルギー等によるもの	薬理・毒性に基 づく副作用のよ り蓄膿が発生す る。	薬理・毒性に基 づく副作用のよ り蓄膿が発生す る。	蓄膿改善と 副作用の悪化	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ 化等に伴う使 用環境の変 化
内用	クロタミン	オイツクス	本剤は抗ヒス タミン作用を 示さないべし。 またヒトの皮 膚感覚のうち 一つである皮 膚感覚を抑制 するが、他の 皮膚感覚には 影響を与 えない。した がから、抗ヒ スタミン剤、 局所麻酔剤ヒ ビは作用競合 者である。	本剤に対する過敏 症の既往歴	0.1~5%未満 (敏感、刺激 感状、ピリヒ リ感、ひりか れ感等)、癰 症、発赤増 強、紅斑増 悪、分泌物 増加、浸潤 (傾向)	・高齢者・妊娠 婦又は妊娠 している可能 性のある婦 人には、大 量・長期につ かる広範囲 の使用は避 ける。	・高齢者・妊娠 婦又は妊娠 している可能 性のある婦 人には、大 量・長期につ かる広範囲 の使用は避 ける。	通常、症状に上 り過量を1 日数回、患部に塗布または 擦する。	通常、症状に上 り過量を1 日数回、患部に塗 布または 擦する。

製品群No. 59

皮膚軟化薬(吸出しを含む)

ワーカートNo.39

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 豊富な副作用のおそれ や重篤な副作用のおそれ	D 滥用のおそれ や重篤な副作用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) につかわるおそれ	F 効能・効果・症状の悪化 につかわるおそれ	G 使用方法(使用のおそれ)	H スイッチ 等に伴う 使用環境の 変化
評価の視点	薬理作用	薬理作用	併用禁忌(他 との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	併用注意	薬薦ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理対象(被 害性)に基づく 適応禁忌	スイッチ 等に伴う 使用環境の 変化
販賣成分	リドカイン ギンガムカイン 液(4%)：塗 酸リカイン 類似のため 使用	ギンガムカインのナ トリウム(4%：塗 りをプロック する活動電位 の伝導を可 逆的に抑制 し、知覚神經 及び運動神 経を遮断す る局所麻酪 薬である。表 面麻醉効果 は、塗酸アロ カインよりも 強く、作用持 続時間は塗 酸アロカイン よりも長い。	氨基毒性に 基づくもの によるもの	氨基毒性に 特異体质ア レルギー等 によるもの	氨基毒性(被 害性)に基づく 薬薦	氨基投与 (投与により障害 の発発・悪化のおそれ)	氨基対象の 部位 (に注意を要 する部位を 除くおそれ)	スイッチ 等に伴う 使用環境の 変化
抗炎症成分	クリチルリチ ン酸ニカリウ ム クリチルリチ ン酸モノアン モニウム	クリチルリチ ン酸は急性 の酸は急性 な炎症に対する 作用(浮腫抑制 作用、肉芽 抑制作用、ラッ トモソット作用 する。抗炎症 作用は主成 分であるアリ チルチコノ酸 の化学構造 がハバトロ コーチソンの 化学構造に 類似している ところによる と推定され る。	クリチルリチ ン酸	クリチルリチ ン酸	クリチルリチ ン酸	5%以上又は 頻度不明(過 敏症)	眼科用として使 用しない、	表面麻酔 では80～200mg(2～ 5ml)を使用する。 年齢、部位により適 量減ずる。 幼児(特に6歳以下)では 低用量から投与を開始。

皮膚軟化薬(吸出しを含む)

製品群No.59

ワークシートNo.39

リストの評価	A 療理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	D 過用のおそれ E 患者背景既往歴、治療状況等 (重篤な副作用につながらないおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながらないが、注意すべき副作用のおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 併用環境の 変化
評価の視点	薬理作用	薬理作用	薬理的な副作用のおそれ	薬理ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく過度禁忌 薬理・毒性に特異体质アレルギー等によるもの	症状の悪化についた際の対応 再発・悪化のおそれ	スイッチ化等に伴う併用環境の変化
二タミンローラー(ビタミンC)	外用として ローラー(ビタミンC)	併用禁忌(他の併用により過度に副作用が発生するおそれ)	微小循環系の賦活作用 を有し、末梢血行を保つ。 血管安定化作用有り、血 管壁や血管抵抗性を改 善する。 抗酸化作用 を有し、過酸 化脂質の生 成を抑制す る。 内分泌系の 賦活作用を 有し、内分泌 の失調を是 正する。	薬理・毒性に特異体质アレルギー等によるもの	薬理ではないが、注意すべき副作用のおそれ	症状の悪化についた際の対応 再発・悪化のおそれ	スイッチ化等に伴う併用環境の変化
※「ナリチラ酸」「エビス」 角質軟化成分	角質溶解作用 角質剥離作用	「エビス」 角質軟化成分	本剤に対し過敏症 の既往歴	本剤は注釈として 記載。及び陽が ある場合、新 生児、乳児、小兒 にあらかじめ適 切な処置を行 った後使	過敏症に長期・大量使 用した経験者用い、2 回以上に限りかえ る。 2回以上の過敏 症や副作用は 2回以上に限りか えられる。 3%、成人：ナリチラ酸とし て2~10%	1.ビタミンC欠 乏症の予防及 び治療 2.末梢循環障 害、動脈硬化 症、静脈血栓 症、血管瘤 症、血栓性靜 脈炎、真性 筋膜炎、四肢冷感 症) 3.過敏化能質 の増加防止	1.ビタミンC欠 乏症の予防及 び治療 2.末梢循環障 害、動脈硬化 症、静脈血栓 症、血管瘤 症、血栓性靜 脈炎、真性 筋膜炎、四肢冷感 症) 3.過敏化能質 の増加防止

※「エビス」の使い方

毛髪用薬(発毛、養毛、ふけ、かゆみ止め用薬等)

製品群№. 60

ワークシート№.40

リスクの程度 の評価	A 薬理作用 B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ すべき副作用のおそれ	D 服用のおそれ E 患者背景(既往歴、治療状況等) (薬剤な副作用におそれ)	F 効果・効果・金物の悪化 につながるおそれ	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	効能効果・副作用の悪化 に伴う使用 方法
発毛促進成分	基ビカブンプロテイン	併用禁忌他 併用に伴う副作用に より重大な問題 が発生する おそれ)	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の 変化
基ビカブンプロテイン	基ビカブンプロテイン	併用禁忌他 併用に伴う副作用に より重大な問題 が発生する おそれ)	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の 変化
基ビカブンプロテイン	基ビカブンプロテイン	併用禁忌他 併用に伴う副作用に より重大な問題 が発生する おそれ)	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	重篤な副作用のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の 変化
ミノキシジル	医療用には なし	医療用には なし	医療用には なし	医療用には なし	医療用には なし	スイッチ化 等に伴う使 用環境の 変化
ビドラミン ヒスタミン成分	ビドラミン ヒスタミン成分	ビドラミン ヒスタミン成分	ビドラミン ヒスタミン成分	ビドラミン ヒスタミン成分	ビドラミン ヒスタミン成分	スイッチ化 等に伴う使 用環境の 変化

毛髪用薬(発毛、養毛、ふけ、かゆみ止め用薬等)

リスクの程度 の評価	A 療理作用 E 相互作用	C 重要な副作用のおそれ D 重要な副作用のおそれ E 患者背景(既往歴、治療状況等) (薬局の副作用につづけるもの)	F 効能・効果(症状の悪化) につながらるおそれ	G 使用方法(適応用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化
評価の観点	療理作用 相互通用	重要な副作用のおそれ 薬理毒性に特徴的な副作用の 発現	薬理毒性に基づく通応禁忌 薬理毒性に特異体質アレルギー等 によるもの	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	スイッチ 化等に伴う使 用環境の変 化
ヒタミンE 成分ほか	ハントノール 注入剤はあ りハントノール 注射液	生体内に入 り入れられた ハントノール は、体内で容 易に脂溶性と してハントノ ン酸は Coenzyme (CoA)→アセ チルCoAと なって、TCA サイクルにさ けられる。オキサロ 酢酸のアセチ ル化、神経刺 激伝達によ り不可欠であるア セチルコリニ の生産、その 他のアセチル アセチルアミノ酸 のアセチル化 に貢献している。	薬理毒性に基づ く通応禁忌 頻度不明(腹 痛、下痢)	血友病の患者(出 血時間の延長させ るおそれ) ・小児等	ハントノール比て1回20 ～100mgを1日1～2回 点滴静注

③下記医薬の
うちハントノ
ールの次第又
は代謝産物が
関与すると推
定される場合
(下記疾患に
対して効果が
ないのに月余
にわたって過
然と効果なし
い)。
・スレブトマイ
シン及びカナ
マイシンによる
副作用の予防
及び治療
・接触皮膚炎、
急・慢性湿疹
・術後腫脹

・ハントノ
ールは塵埃ウ
サギの呼吸、
循環系、腸道
運動にほどんど
作用を示さな
いが、実験的
に虫垂を切除
したウサギの
腸運動亢進を亢
進するところが
認められる。

・Wistarラッ
トを用いた試
験において
非塗口投与さ
れハントノ
ールの尿中
排泄はハント
ノール濃度に比
して緩慢であ
り、体内利用
時間の延長
が示唆され
れている。

ハントニ
ルエチル
エーテル
医療用には
なし

リスクの程度 評価	A 薬理作用 D 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	B 滅用のおそれ (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果・症状が悪化するおそれ	G 使用方法(個使用のおそれ)	H スイッチ 使用環境の変化
評価の視点	薬理作用	薬理作用	薬理作用 基づくものによるもの	薬理・毒性に特異性 によるもの	薬理・毒性に特異性 によるもの	スイッチ化 用環境の変化
塗膜エンドリン 除成分	塗膜エンドリン (不整脈、心 臓病と併用に より塗膜が発生す るおそれ)	塗膜エンドリン (点滴口を閉じ て点滴器を用 いるおそれ)	塗膜エンドリン 「ナガキ」 (点眼剤な いため点滴口 栓を採用)	モノアミン代 謝酵素阻害剤 (塗膜は血圧上昇)	モノアミン代 謝酵素阻害剤 (塗膜は血圧上昇)	モノアミン代 謝酵素阻害剤 (塗膜は血圧上昇)
塗膜エンドリン リジン 除成分	塗膜エンドリン （不整脈、心 臓病と併用に より塗膜が発生す るおそれ）	塗膜エンドリン （点滴口を閉じ て点滴器を用 いるおそれ）	塗膜エンドリン リジン （点滴口を 閉じて点滴器 を用いるおそれ）	MAO阻害剤 （点滴は血圧上昇）	MAO阻害剤 （点滴は血圧上昇）	MAO阻害剤 （点滴は血圧上昇）
塗膜エンドリン アスピチミン 除成分	塗膜エンドリン アスピチミン （配合剤であ るオムニナ ドリウムなど 塗膜が主 なで採用	調節機能改 善作用	調節機能改 善作用	調節機能改 善作用	調節機能改 善作用	調節機能改 善作用
潤滑調節 除成分	潤滑調節 （配合剤であ るオムニナ ドリウムなど 塗膜が主 なで採用	潤滑調節 （配合剤であ るオムニナ ドリウムなど 塗膜が主 なで採用	潤滑調節 （配合剤であ るオムニナ ドリウムなど 塗膜が主 なで採用	潤滑調節 （配合剤であ るオムニナ ドリウムなど 塗膜が主 なで採用	潤滑調節 （配合剤であ るオムニナ ドリウムなど 塗膜が主 なで採用	潤滑調節 （配合剤であ るオムニナ ドリウムなど 塗膜が主 なで採用

リスクの程度 の評価	A.薬理作用 B.相互作用	C.重篤な副作用のおそれ すべき副作用のおそれ	D.遅用のおそれ べき副作用のおそれ (重篤な副作用につながらるおそれ)	E.患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながらるおそれ)	F.効能・効果(症状のおそれ) につながらるおそれ	G.使用方法(誤用のおそれ)	H.スイッチ 化等に伴う 変化
評価の視点	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他の併用に より重大な問題が発生する おそれ)	重篤な副作用のおそれ べき副作用のおそれ	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ
消炎成分	アラントイ ン	イブプロフェン アミドプロ ン酸	止血作用 (血栓形成傾向) 併用禁忌(点眼剤なしの 経口剤を深用)	薬理・毒性に 特異性質・ア シド等によるもの	薬理・毒性に 特異性質・ア シド等によるもの	薬理に基づく 過敏症忌 禁	薬理に基づく 過敏症忌 禁
抗ヒリジーム	リゾチア点 眼液	リゾチアム リム	リゾチアム リムは、眼由来 のアレルギー質 で、抗炎症作用 、抗炎症作用 を有する。	リゾチアム リムは、眼由来 のアレルギー質 で、抗炎症作用 、抗炎症作用 を有する。	頻度不明(感 染症)	頻度不明(感 染症)	点眼用のみ使 用
抗リホリチ ム	ノイボルミチ ン点眼 液	ノイボルミチ ン点眼 液	抗アレルギー 作用、角膜上 皮再生促進 作用を有する。	抗アレルギー 作用、角膜上 皮再生促進 作用を有する。	頻度不明(感 染症)	頻度不明(感 染症)	点眼用のみ使 用
硫酸セミウ ム	サンシンク 点眼液	サンシンク 点眼液	結膜粘膜の 萎縮と結合 膜白と結合し て皮膚とつぶ り、病的組織 を剥離して細 胞の新生を 促進する。吸 收血管管を 増殖させ、透 通性を向上さ せる作用をあ らわす。主 要な作用 を抗腫瘍作 用があらわす。	結膜粘膜の 萎縮と結合 膜白と結合し て皮膚とつぶ り、病的組織 を剥離して細 胞の新生を 促進する。吸 收血管管を 増殖させ、透 通性を向上さ せる作用をあ らわす。主 要な作用 を抗腫瘍作 用があらわす。	頻度不明(感 染症)	頻度不明(感 染症)	点眼用のみ使 用、必要前には 用
硫酸ペルベリ ン	スルペニン (硫酸ペル ベルベリン)	硫酸ペルベリ ン	接觸系に作用し て静止作用を 示すことがあり、 止瀉作用があ らわれるもの と思われる。	硫酸ペルベリ ン	硫酸ペルベリ ンとして、通 常1日4～10回 下痢症	硫酸ペルベリ ンとして、通 常1日4～10回 下痢症	硫酸ペルベリ ン